

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

# とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ  
Shiina Howahowa

10

### ルイ

エルの古くからの友人で、  
短弓と蹴り技の達人。

### トイ

エルフの長老の娘。  
無口で物静か。

### ロイド

森の魔物の大討伐に  
初めて参加する  
エルフの新人戦士。

### エル

アースと偶然出会い、  
共に冒険を重ねてきた  
エルフ族の美女。

### アース

本編の主人公。マイペースな  
プレイですっかり有名人に。  
リアルでは38歳独身の  
会社員、田中大地。

### ガルザ

短弓、狩弓、長弓  
全てを使いこなす  
エルフの熟練戦士。

登場人物  
紹介

## プロローグ

(さて、あの子はいるかしら……)

ふとした縁でアースという人間の冒険者とパーティを組み、久々に故郷であるエルフの森に帰ってきたエルは、決定力不足を痛感していた。

アースには言わなかったが、自分が森を飛び出す前は、森に出現するハンティング・グラスホッパーはあんなに強くなかったと記憶していた。自分やアースの弓による攻撃なら、二回も当たれば倒せる程度だったはずだ。なので、二人で森に入ったわけなのだが。

にもかかわらず、今日戦ったグラスホッパーは攻撃を数回受けてもなお襲い掛かってきた。

(それに加えて、森に掛けられたあの幻惑……遠距離から射て倒すという私の得意戦法が封じられた今のエルフの森の中では、接近戦に長けた人が絶対に必要だわ。アース君はある程度近接攻撃ができるようだけど、私は回避するしかない。このまま二人だけで戦い続けたら、私達は間違いなく近いうちに死ぬ)

あんなかわいい子はそうそういないから、できれば独り占めしたかったけれど——とエルは**呟**く。この場合の「かわいい」とは内面の話である。

(アース君がキーン族の美人を連れてきたときは、**面食**いなのかと思っつてつい詰め寄っちゃったけど……そういうわけではなかったようだから、あの子を紹介しても多分大丈夫なはず。それに戦力の増強は必須だしね)

そう考えながら村の中をしばらく歩き続けたエルは、ある一軒家の前に到着した。エルはその家の扉を軽くコンコン、とノックする。

「ごめんください。ルイ、いるかしらー？」

「はい、今出ますよー」

ノックに応えて扉を開けたのは、ややロリっぽい銀髪エルフの女性だった。人間で言うならば一五歳ぐらいの外見だが、実際の歳はエルと大差ない。彼女の本名はルーナ・フォレスティとい、普段はルイという愛称で呼ばれている。

「あら、エルじゃない。こんなに早く再び私のところに現われるなんて、何かあったの？」

エルはエルフの村に帰ってきたと挨拶回りをした際、このルイの元を訪れていた。

「うん、ちょっと話があるの。中に入らせてもらってもいいかしら？」

ルイは笑顔で頷いて、エルを家に招き入れた。

「はい、お茶が入ったよ」

「ありがとう、ルイ」

エルはエルフの森特産のグリーン・ティを堪能する。ちなみにこのグリーン・ティをプレイヤールイが飲んだら、「これは抹茶じゃないか！」と言っだろう。

「それで、お話つてのは何かしら？ まずは話してみて」

カップを置いたエルは、ここを訪れた理由をストレートに話すことにした。

「そうね、親友の貴方だからシンプルに言うわ。しばらく、私と外の世界から来た人とで組んでいるPTに加入してもらえないかしら？」

エルからの申し入れに、ルイはうーん、と考えるそぶりを見せる。それから、ぼつぼつと確認を始めた。

「その子は、極端なわがままを言う子？」「無意識に差別とかしてこない？」「無茶をする子？」

エルも一つ一つ質問に答えを返していく。

「全然欲のない子ね」「ちゃんと相手を気遣えるわ」「むしろ慎重かしら」

エルは返答を聞いて、ルイはふむふむ、とまた長考に入る。

そうして数分考えた後、最後にこう質問した。

「私が短弓しか使えないのは知っているでしょう？ 何で他のエルフを誘わないの？」

短弓、狩弓、長弓の全てを得意とするのが普通のエルフにあって、なぜかルイは短弓しか上手く扱うことができず、村の中で孤立した時期があった。

「むしろ、貴方の才は短弓に全て注がれたんじゃないかしらと私は思うけどね。その才を私達に貸してほしいのよ」

エルフの言う通り、ルイの短弓の腕は他を圧倒していた。それを面白く思わなかった者が色々と邪険にしたことも、彼女の孤立の原因の一つである。

そして、その時期にルイを支えたのがエルであった。

それはさておき、エルは先ほどのエルフの森の中の活動について、ルイに話し始めた。特に、森の魔物の中では比較的弱い部類に入るはずのハンティング・グラスホッパーが、かなりの強敵になつていたことを念入りに。

「なるほどね。エルを感じた通り、ここ数十年で妙に魔物が強くなったのは事実よ。全体的に数が減った分、一匹一匹の強さが洗練されたんじゃないかって見方が大半だわ……確かに浅い場所ならいいけど、森の奥に進むなら二人じゃ無謀過ぎるわね」

グリーン・ティを再びカップに注ぎながらのルイの言葉に、エルも頷き返す。

「幸いアース君が……ああ、アース君というのが私とPTを組んでいる子の名前だけだね、一

回戦つた後ですぐ引き返す決断をしたのよ。慎重でしょ？ 大抵はもう少し進もうと考えそうなのよ」

戦力的に進むのは危険つてことを素直に認められるのはいいことよね——エルはアースの判断をそう評価した。

「確かに慎重みたいね。不慣れな場所なんだからそれぐらい慎重で正解よ。私もその子を臆病だとは思わないわ」

エルの評価に概ね同意の様子を示したルイは、椅子に座つたまま両目を伏せてPTに入るか否かをしばらく考え……

「うん、その子なら馬鹿馬鹿しい行動を取つて無駄死にすることはなさそうね……いいわ、私も貴方達のPTに入りましょう。どうせそのうちまた魔物の討伐をしなきゃいけない時期が来るから、早めに打ち解けておく方がよさそうだし……」

そう言つてエルに微笑んだ。

それから家の奥に姿を消したルイは、一五分ほど経過してから、戦闘用の装備一式を身に着けて戻つてきた。

「そのアース君つて子に会うなら、相応の装備をしていないとちゃんと戦えるか疑問視されそうだからね……」

確かに先ほどの軽装より今の格好の方がアース君も不安に思わないか、とエルもルイの行動に納得する。

「ところでエル、貴方達は普段どこに居るの？」

「うん、今は隠れ一番人気の宿屋に泊まってるわ」

エルの言葉を聞いたルイは、うーんと考えてからこう持ちかけた。

「あそこは比較的安いけど、それでも長期滞在となればかなりお金が掛かるでしょ？ アース君って子次第だけど、よければ私の家に泊まらない？ それでかなり資金が浮くと思うわよ。私の家は無駄に大きいのに、一人で住んでいるから少々寂しいのよね」

エルと長く一緒にPTを組んでいる子なら、トモ邪なこともしないでしようし、とルイは最後に付け足す。

「そうね、それも含めて話し合いましうか。とりあえずアース君も呼び出さない」と

そうして二人はアースと合流するべく、ルイの家を出ていった。

## 1

現実世界では田中大地、そしてこの「ワンモア・フリーライフ・オンライン」の世界ではアースであるところの自分は、調味料や矢の補充をするため、あちこちのお店に足を運んでいた。

その最中、エルからのPTチャットが届いた。

【アース君、今大丈夫かしら？ PTメンバーになってくれるって人がいるから早速顔合わせをしたいのだけれど、今からではどう？】

そうか、エルが言っていた知人の勧誘は上手くいったらしい。これで三人PTになるな。

【了解、じゃあどこで会おうか？】

そうとくれば少しも早い方がいいだろう。自分はすぐに了解の意思をエルに返した。

【合流場所は、私達が泊まっている宿屋の部屋にしましょう。あそこなら間違いもないし】

自分がここエルフの村の施設でチェックしたのは食材店や鍛冶屋、木工所といった特定の場所だけだったから、宿屋なら分かりやすく助かる。

【了解、じゃあ今すぐ引き揚げるよ。こちらが遅くなったら、申し訳ないけど部屋の中で待ってい

てほしい」

エル達の方が近かったら、少し待たせてしまってもいいかもしれない。幸い補充も終わったし、急ぎの用事もない。早足で帰ることにするか。

【じゃ、また後でね】

さて急ごうか。待つ側は一分が一〇分に感じられることもあるからな……

それから六分ほどで、宿屋に帰還できた。部屋の扉をノックすると、中から「アース君かしら？」とエルの声がかかる。

「ああ、今帰ったよ。扉を開けてもいいかな？」

ちやうど着替え中でした、なんてのは非常に気まずい。キヤーエッチー！ で済むのは漫画の世界だけであって、実際にやった場合は変態だの覗き魔<sup>のぞ</sup>などど散々罵<sup>のの</sup>られた上で長く汚名を着せられることになる。精神衛生上、それだけはなんとしても回避せねば……

「大丈夫よ、入って頂戴」

どうやら無用の心配だったらしく、すぐに許可が出たので扉を開ける。

部屋の中には、エルと、やや幼い感じの銀髪エルフ女性がいた。

「さて、アース君。この子が新しいメンバーになるルイよ。私の友人でもあるわ」

ルイさんね。エルの友人ということは、幼いのは見た目だけなのだろう。エルフの歳は本当に分からないな。

「ルイさんですか、私はアースと申します。今回、PTを組んで一緒にエルフの森の探索をして頂けるといふことで、間違いはありませんか？」

ある程度はエルから話が行っていると思うので、そう切り出してみた。

「ええ、そのつもりですよ。ちなみに私が使える弓は短弓限定ですが、そこはよろしいのでしょうか？」

このルイさんからの言葉に、自分は首をひねる。短弓限定の何が悪いのだろうか？ 短弓、狩弓、長弓それぞれに長所と短所があるのだから、長所を生かすように戦えばいいだけだ。ましてや、エルフの森では地形上接近戦になりがちだし、むしろ弓に限れば短弓が一番有効である。だから自分は……

「特に問題になることではないかと。短弓の長所を生かして戦って頂ければ、それでよいと思われませんが」

とルイさんに伝える。

するとルイさんはほっとしたようで、胸に手を当てて小さく息を吐いた。  
「では、これからよろしくお願いしますね」

そう言って頭を下げてくるルイさん。自分も、こちらこそ、と返答しながら一礼する。

「話がすんなり纏<sup>まと</sup>まって何よりね。それでアース君にはもう一つ提案があるのだけど、いいかしら？」

ルイさんと話をしている間はずっと黙っていたエルが、そんな風に話しかけてきた。提案か、なんだろう？

「ルイの家に拠点を移さない？ ほら、ずっと宿屋に泊まっていたら結構出費がかさむでしょ？ ルイは自分の家を持っているから、そっちのお世話になれば安く済むわ。もちろんルイからの提案であって、私が強要したわけじゃないからね」

む、確かにここに泊まり続ければ、宿代はそれなりのものになるが……だからといって女性の家に上がり込むのはなあ。

「ちよつと確認。そのルイさんの家は、他に誰か一緒に住んでいるのかな？」

自分の質問にルイさんは、

「ううん、私一人で住んでいるの。家がちよつと大きいから、それだと寂しくてね。だから誘ってみたんだけど」

とご返答。

うーん、そんな家に男が入りしたら、どう転んでもろくなことになりそうにないぞ。

「エルはルイさんの家にお世話になりなよ。自分はここでいいから」

自分は頬杖をついて、そう答えた。幸い色々と稼いできたので、宿に泊まり続けても問題ないだけの資金は十分にあるし、森で手に入る素材を売れば、多少なりともお金は入ってくるだろう。もちろんその儲けはPTで分けるけど。

「どうして？」

自分の返事を聞いて、頭上に疑問符を浮かべるルイさん。分からないんじゃないので、女性の家に突如親戚でもない男性が上がり込むと色々周りから勘ぐられてよろしくないだろう、と伝える。

「あーうん、なるほどね。確かにそういう考えもあるわね」  
すぐに納得したのはエルだった。

「そんなに気にすることでもないと思うけど……そういうなら、無理強いはしないわ」

こちらはルイさん。納得するのにエルより少し時間をかけた。やはりエルは今まで外の世界を旅してきた分、こういったニューアンスにも理解があるのだろう。

ルイさんが言うように一般的かどうかはさておいて、女性の家に出入りするのは個人的に避けたい。どこに地雷ゾーンがあるか分かったものではないから……いくらPTメンバーといえども、そこだけは譲りたくない。



この件の話し合いは自分がログアウトする寸前まで行われ……結局、自分はこのまま宿屋に、エルは今夜からルイさんの家にお世話になるということで纏まった。

ルイさんは「気にし過ぎだと思っけどね?」とあまりすっきりした感じではなかったが、エルが「男の子には色々と言出しにくい事情があるのよ」のひと言で丸め込んだ。この言葉に思うところがないわけではないが、話が纏まったならもう掘り返すまいと割り切った。予想外に疲れたな……



翌日。ログインしてエルとルイさんと合流し、エルフの森へ。

ハムスターに似た姿のキーン族、とらちゃんの案内で、浅い場所の散策を始めたところまでは、初日とまったく変わらない。

ただ今回は枯れた老木もなかったし（老木自体はいくつもあつたが、まだまだ元気なのは素人目にも分かった）、動物達にもあんまり出会わない。そして後者の理由は、ひんぱん頻繁にモンスターと遭遇するためのだが……

「なあ、エルさんや。ちよつといいかね?」

隣に立っているエルに、小声で話しかける。

「どうしました、アースさんや?」

エルもなぜか、落語に出てくるおばあちゃんのような喋り方で返答してくる。

今もモンスターと戦闘中にもかかわらず、何でのんびりこんな話をしているのかという……

「もう、全部ルイさん一人でいいんじゃないかな?」

「それをあまり否定できないのが困るわね」

そう、たまに漫画とかである無双シチュエーションがぴったり当てはまるほどに、ルイさんは強かった。

最初に出遭ったハンティング・グラスホッパーをさっくりと瞬殺したのを皮切りに、カプトムシみたいなハンティング・ホーンも、ノギリクワガタのようなツインブレイド・ホーンも、短弓であつという間に倒してしまふ。そのため中衛の自分と後衛のエルの出番は、ここまで見事なほどにまつたくなし!

例えるならば、初心者が新しいフィールドを観光するためにトッププレイヤーが引率してくれているような感じと思っけ頂きたい。戦わないので自分のスキルは上がらないが、モンスターがどういふ攻撃をしてくるのか、落ち着いて観察できるのは大きい。

今日は結構魔物がいますね。これは近いうちに、大掛かりな討伐隊が組まれるかもしれないで



すね」

再びハンティング・ホーンをあつさり倒して、何事もなかったかのように淡々とそんな感想を口にするルイさん。

彼女は自分のように多種多様な攻撃手段を持つわけではなく、短弓といくつかの魔法を併用して戦うバトルスタイルのようだ。魔法は基本的に補助魔法主体で、メインは短弓による攻撃。アクロバティックな動きから容赦なくモンスターに矢が降り注ぐ。宿泊場所のこと以外で彼女に逆らうのはやめておこう。

「お、お疲れ様です」

自分とエルも周りの警戒はしているから、一応完全な役立たずというわけではない。だが戦闘の大半がルイさん無双に終始したことに自分たちはちょっと引き気味であり、それが声にも少し出てしまった。

「ルイ、あなた貴女、ちょっと強くなり過ぎたんじゃ……私の記憶にある貴女の数は強くなってるんだけど」

エルもそう言っている。やっぱりエルフの中でも別格の強さなのは間違いないな。だが当のルイさんは……

「そうね、森の魔物達に対抗するためにはどうしても強くなる必要があったし。でも、ハイエルフ

の人達もつとすごいんだけどね……何度も稽古をつけてもらったけれど、結局一回も勝てなかった。かなり手加減されてもまったく歯が立たないのが悔しくて、ついつい訓練に熱が入って数百年が経ったらこうなってただけよ」

と、淡々と喋る。

しかし、ロリっぽい外見のルイさんの口から「数百年の訓練」という言葉が出ると、自分の中で色々混乱しそうで頭が痛くなってくる。何せルイさんの身長は大体一五〇センチメートルあるかないかだ。そんな子が、出てくるモンスターを圧倒しているんだから恐ろしい。まるで小学生に守られているような錯覚を起こすんだよ、これが……

外見なんて本当に当てにならない。エルフという特殊な補正がなかったら、色々と落ち込んでしまうところだ。

それからしばらく三人で森を散策した。まだ浅い場所というのが原因なのか、出てくるモンスターは大半が単体であり、たまに二匹のことがあったぐらいだ。

単体ならばルイさん一人で、二匹のときは片方をルイさんが、もう片方を自分とエルが受け持つて戦った。モンスター側の攻撃パターンをある程度把握できていたから、自分が蹴りとスネークソードで立ち回ってモンスターの注意をひきつけ、その隙にエルが長弓で射抜くという戦い方で、

危なげなく勝つことができた。

「蹴りに変わった剣、そして弓か……そこまで攻撃力はないみたいだけど、複数の武器を扱える器用さは素晴らしいわね」

自分の闘いを見たルイさんが下した評価がこうだった。引き出しの多さが自分の売りだから、真つ当な褒め言葉だろう。

その後も何回かモンスターと戦いながら森を進み続けると少々開けた場所に出たので、そこで休息を取る。周りが見渡せる分、不意打ちを受けにくいと考えられるからだ。

そして食事もおこうという話になり、ルイさんが取り出したのは味も素っ気もない長細いクッキーみたいな、エルフの村で売っている携帯食料だった。水分としてはお茶を用意しているよのだが……

「ルイ、そんなので足りるの？」

それを見たエルがつい声を上げた。確かに戦士の食事としては心もとない。数週間にわたって旅をしなければいけない冒険者が持ち運ぶものとしてなら、まだ分かるのだが。

「でも私が料理をすると、なぜかみんな紫色のスライムみたいなものになるから……」

ギャグマンガの世界ですか……あんまりにも切ないので、自分はアイテムボックスに眠らせておいた【ドラゴン丼】を取り出して、ルイさんに押し付ける。この世界のエルフがお肉を食べること

は何度も確認しているから、嗜好的な問題はないはずだ。

「え？ 食べていいの？」

そう聞いてくるルイさんに、戦闘で貢献してもらったんだから、と理由を添える。

それならば、と言って井の蓋を開けたルイさんは、ふわっと漂うお肉の香りに「わあ……」と声を漏らした。そしてルイさんが食べ始めたところを見計らってエルに手招きして、自分の近くに来てもらう。ちよつと聞いておきたいことができたからだ。

（なあ、ルイさんの家では晩御飯とかはどうなの？）

「ワンモア」の世界は昼が三時間、夜が二時間で過ぎるから、自分がログアウト中にこっちでは数日経っている計算になる。自分の質問にエルは……

（食事は私が全部作ってた。宿泊費の代わりって言ったらとっても喜んでたけど、まさかルイは料理が壊滅的だったとはね……お茶とかを入れるのは上手かったから、てつきり料理もできるものとはばかり思い込んでたわ。休憩時の食べ物私がお意用しておくか、聞いておくべきだったかもしれないわね）

そうか、家事はエルが担当していたのか。ルイさんにとっても、エルが家に泊まるのはいいことなんだな。

やがて食事休憩を終えて、あと少し探索したら村に帰ろうという話になった。いくらルイさんが

強いといっても、彼女だけを頼って森の奥まで突き進むのはよろしくない。自分とエルがこの森に慣れるまで、もう少し時間をもらいたい。

「ねえ、アース君。やっぱり私の家に泊まりに来ない？」

帰り道、ルイさんが自分にそう言ってきた。

「いやいや、昨日も言いましたけど、女性の家に男性が入りするのは好ましくありませんよ」

昨日と同じ反論で断ろうとしたが、ルイさんは自分の外套をがしつと挿んでくる。

「休憩のときにくれたあのご飯、本当に美味しかった。毎回は無理でも、できるだけちよくちよく作ってほしい。その代金として、私の家に泊まっていいから」

Oh……また料理が原因ですか。

でも今までのパターンで、間違いなくこれがフラグだつてことは分かっている。称号「人災の相」のパワーアップは回避したいし、何が何でもルイさんの家に泊まるわけにはいかない。結局、今日の昼の分についてはお金で支払うという形で落ち着いた。

ちなみに、倒したモンスターから手に入れた素材をお店で売って三分割すると、一人頭二二〇〇〇グローになり、ルイさんはその中から代金を支払ってくれた。

うーむ、こうなったら、中断していた肉まんとかの作り方を本腰入れて考えるか……



「スキル一覧」

〈風迅狩弓〉 Lv 14 〈剛蹴〉 Lv 24 (↑1 UP) 〈百里眼〉 Lv 24 〈技量の指〉 Lv 7 〈小盾〉 Lv 23

〈隠蔽・改〉 Lv 3 〈武術身体能力強化〉 Lv 40 〈スネークソード〉 Lv 43 (↑2 UP)

〈義賊頭〉 Lv 19 (↑1 UP) 〈妖精招来〉 Lv 5 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能)

追加能力スキル

〈黄龍変身〉 Lv 4

控えスキル

〈上級木工〉 Lv 32 〈上級薬剤〉 Lv 21 〈釣り〉 Lv 2 〈料理の経験者〉 Lv 9

〈鍛冶の経験者〉 Lv 21 〈人魚泳法〉 Lv 12

EXP 30

称号・妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者

妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相

託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー (胃袋限定) 義賊

人魚を釣った人 妖精国の隠れアイドル

プレイヤーからの二つ名・妖精王候補 (妬) 戦場の料理人

2

翌日のログイン後、エルとルイさんにPTチャットで連絡を入れて、今日の探索はお休みしようと伝えた。実は緊張から少し疲れが溜まっていたというエルがすぐ賛成し、そんなエルを休ませたかったらしいルイさんも同意してくれた。ということとで今日は一切戦闘行為をせず、のんびりと過ごす日に決定。

PTチャットを閉じた自分は宿屋から出て、食材店に向かった。購入するのは薄力粉とベーキングパウダー (のようなもの) に加えて、しいたけに近いきのこ、ねぎの代わりとなるリドとお肉だ。十分な量を購入してから宿屋へと戻った自分は、宿屋の主人に一つ頼み事をしてみた。

「いきなりの要望で申し訳ないのですが、調理場を貸してもらえないでしょうか？」

「ああ、料理がやりたいのかい？ ならば五〇〇グロー支払ってくれば開放するよ」

申し入れはあっさりと通った。なんでも自分のように料理を作りたい人は時々いるので、有料で開放する方針を採っているらしい。もちろん、朝や晩などの調理場が忙しい時間帯は除くとのこと。

早速使用料を払って、調理場に入る。結構大きくて立派だな、これならばのびのびやれそうだ。買ってきた食材を並べて、調理開始。

まずは生地作り。薄力粉とベーキングパウダーをボウルに投入し、へらでまぜまぜっと。しっかりと混ぜたことを確認したら砂糖を少々入れて、ぬるいお湯を少しずつ足しながら、さらにボウルの中身を混ぜ合わせていく。このとき、お湯の入れ過ぎでべたつかないように十分気をつけなければいけない。

「む、まだ硬すぎるかな……？」

時々自分の耳たぶと比べて硬さを確かめながら、作業を続ける。当然、耳たぶに触れた手は都度洗い直す。

耳たぶと同じくらいになったところでお湯の投入を止め、ここからは手を使ってよくこねる。

粉っぽさが抜けないと美味しくなってくれないので、サボらずにしっかりと根気よく。そうして生地との格闘を終えたら、ボウルに蓋をして〈料理〉スキルのアーツ《料理促進》を使ってからしばらく寝かせる。

次は、生地の中に入れる具材の製作にかかる。きのこリドはみじん切りにして、お肉は包丁で細かく切って叩いてひき肉にする。それらを生地とは別のボウルに入れた後、塩コショウ、ごま油、片栗粉、お酒に醬油といった調味料などを投入して粘りが出るまでしっかりとこね合わせる。この

とき、均等に混ぜざらず場所によって味がしなかったり逆に濃かったりムラがあると、美味しさが損なわれてしまうので注意すべし。

上手くいったら、ここで先に作っておいた生地の様子を確認する。

「ふむ、この様子なら大丈夫かな？」

《料理促進》のおかげか、具材と格闘していた数分の間に生地はだいぶ落ち着いたようだ。これを適当な大きさにちぎり分けて、麺棒を使って丸く平らに均す。うどんのときもそうだったが、リアルでやるときは台座や麺棒にくっつかないように薄力粉を軽くつけてやらないとダメだからね？

生地を大体直径一〇センチぐらいの皮にしたら、上に具材を載せて、生地の端をつまんでひだを寄せていく。具がこぼれないように生地で器を作るイメージだ。皮も具もたくさん作ったので、この単純な作業にも結構時間が掛かる。

このちまちまとした作業が終わったら、今度はひだを寄せ集めて上でねじって留めることにより、具を完全に皮の中に閉じ込める。これでようやくおなじみの形となった。さらに下にクッキングシートもどきを敷くと、よりそれっぽくなる。

「さて、あとはガンガン蒸し上げる、と」

目いっぱいお湯を沸かし、十分な湯気を確認してから今回の製作物——「肉まん」を蒸し器の中に並べて、その上には布巾を被せておく。

本来はこのまま二〇分蒸すのだが、これだけ大量に作るとなると、そんなに時間を掛けていたらいつ作業が終わるかわからない。ここでも《料理促進》で蒸し時間を大幅に短縮することにした。

【肉まん】

熱々の美味しい肉まん。特に寒い地方に出かけるときに持っていくと役に立つかもしれない。

効果・冷気抵抗効果（弱）

製作評価：8



試食すると、なかなか美味しく出来ていた。これならば人に食べさせても問題はないだろうと思うが、どうだろう。一つでそれなりにお腹がふくれるし、クッキングペーパーもどきを剥がして口に運ぶだけだから手軽にすばやく食べられる。昨日は開けた場所があったからのんびり食事できたものの、毎回そんな幸運に恵まれると考えてはいけない。

そう、昨日と一昨日歩いた感想としては、エルフの森は幻惑が掛かっている影響で一種のローグライクダンジョンめいて毎回形が変わるようになってきている感じだった。ならば毎回休憩はここで

おうと決めない方が賢明だ。

しかしだからといって、何も食べずに長時間戦闘を続けるわけにもいかない。そういうときおにぎりという携帯食は本当に優秀なのだが、手持ちのお米の量が少ないので、エルフの村でも手軽に買える小麦粉を使った料理を作ったかったわけだ。パンを焼いてサンドイッチにする手もあるものの、そればかりだと飽きるという問題がある。

きちんと綺麗に調理場の後片付けを済ませ、〈料理の経験者〉スキルを控えに入れてから、宿屋の主人に終わりましたと報告する。すると、何を作ったんだい？ と聞かれたので、答え代わりに一つ肉まんをサーブした。

それを受け取った宿屋の主人は、早速ほふほふと口に入れ、

「こいつは熱々で美味いな。しかも手軽にすぐ食べるのがまたいいな」

と、こちらの狙い通りの感想を言ってくれた。

また調理場を使いたいときは言ってくれよ、との言葉を頂いた後で自分の部屋に戻り、エルにP Tチャットを飛ばす。

【エル、今ちよつといいかな？】

【あ、アース君か。どうしたの？】



「スキル一覧」

- 〈風迅狩弓〉 Lv 14 〈剛蹴〉 Lv 24 〈百里眼〉 Lv 24 〈技量の指〉 Lv 8 (↑1 UP) 〈小盾〉 Lv 23
- 〈隠蔽・改〉 Lv 3 〈武術身体能力強化〉 Lv 40 〈スネークソード〉 Lv 43 〈義賊頭〉 Lv 19
- 〈妖精招来〉 Lv 5 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能)
- 追加能力スキル
- 〈黄龍変身〉 Lv 4
- 控えスキル
- 〈上級木工〉 Lv 32 〈上級薬剤〉 Lv 21 〈釣り〉 Lv 2 〈料理の経験者〉 Lv 10 (↑1 UP)
- 〈鍛冶の経験者〉 Lv 21 〈人魚泳法〉 Lv 12

EXP 30

称号：妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者

妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相

託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー (胃袋限定) 義賊

人魚を釣った人 妖精国の隠れアイドル

プレイヤーからの二つ名：妖精王候補 (妬) 戦場の料理人

エル の 状況を確認すると、ルイさんの家の掃除が終わったところらしい。これからちょうどお茶の時間になるといので、いったんこちに来てもらうことにした。

ルイさんの家の場所を聞いてこちから出向くということも考えたが、家まで行く↓ちょっとお茶でもと誘われる↓なし崩し的にご宿泊決定↓トラブル発生……！ というパターンの可能性を考えて却下したのだった。

「とりあえずこんな物を作ってみたので、試食してほしいと思ってね。自分でも試食してそこそこ美味しいとは思ってたんだが、他の人の意見も聞きたいからね」

そうひと言添えて、エルに肉まんを四つほど持たせる。結構肉まんってお腹に重たいし、お茶請けとしては二つもあれば十分だろう。

「新しい料理かあ……じゃあルイと一緒に食べてみるね、ありがと」

そう言っ て帰っていくエルを見送っ てから、宿屋の個室でログアウト。

エルとルイさんの感想次第では、具材を考え直さないといけないな……



肉まんを作った日から数えて、リアルの時間で一週間ほどが経過した。

この一週間は毎日エルフの森に入り、森の中における戦闘の感覚を掴む訓練を続けた。ルイさんはもちろんとして、自分もエルも森の浅い場所での戦いにはほぼ完璧に適応し、モンスターとの一対一でも落ち着いて戦えるようになった。自分のスキルLvはあまり上がっていないが、プレイヤーとしては大きく進歩しただろう。

「どうやら魔物のおかわりは来ないようっすね、おつかれさまでっす！」

そして大きく変わったことといえばもう一つ、ロイドという若い男性エルフがPTに参加したことが挙げられる。

なんでも、そろそろお前も訓練で得たことを生かして森の中でも戦えるようになれ、と親に言われたらしい。ちなみにもう立派な青年であり、一部の女子が望むようなシヨタっ子ではない。

といってもさすがに一人では不安だったため、村の中でも強いルイさんを頼ってきたそうだが、ルイさんはすでに自分のPTに参加していたので、同行してくれという彼の頼みを拒否。すると、

それならば自分もそのPTに交ぜてもらえないか、と言ってきた。自分達も、そろそろもう少し森の深いところに行くか？ と相談していたところだったので人手は多い方がよく、三人で話し合った結果、ロイド君のPT加入を認めることにした。

ロイド君は水魔法による攻撃と治癒ができ、しかも短弓、狩弓、長弓の全てを使いこなす。弓についてはプレイヤーには絶対不可能な、エルフの特権だ。

一方で、この一週間エルフの皆さんを観察した結果、エルフは弓に秀でる代わりに重量がある近接武器を持ってないのではないだろうか？ という結論にたどり着いていた。実際近接武器である剣を持つエルフは結構いたが、大半がショートソードで、両手剣どころかロングソード以上の重量武器はまったく見なかった。

おそらく妖精にも、龍にも、獣人にも、魔族にも、専用の特性があるんだろう。

「お疲れ様。森の浅い場所ならみんな問題なく動けるようになったわね」

このPTで最強のルイさんからのお墨付きも頂けた。

ちなみに単純な強さで順位付けすれば、ぶっちぎりの一位がルイさん。そこからかなり差が開いて二位がエル、三位がロイド君、ジリが自分だ。ロイド君はここ数日森で戦ううちに見る見る実力を伸ばして、あつという間に自分を追い抜いたのだった。ただしこのランキングに色々な状況への対応力やからめ手のレベルを足すと、自分が二位に上がってくるのだけけど。

「しかし、今日はよくモンスターに出くわすな。森のどこかで大量発生でもしているのか？」

初日は一匹、二日目は一〇匹少々。しかし今日は五〇匹以上を超えていて、それ以上はもう数えていない……

自分と同じ感想を、ルイさんもロイド君も抱いていたようだ。

「確かに異様に多いわね。近いうちに、大規模な討伐指令がエルフ全員に出ると考えて間違いないわ」

「皆さんのPTに入れてもらえて助かったつすよ……いきなり出たところ勝負で臨時PTを組めるほどの実力は、僕にはないですし」

二人の発言を受けて、ルイさんが自分に補足してくれる。

エルフの長老からモンスター討伐指令が出たら、若過ぎたり年老いていたり大怪我で動けなかったりと幾つかの例外を除いて、村にいるエルフは絶対に参加しないといけない。

その際、普段ソロで活動しているエルフでも絶対にPTを組んで戦いに臨む。これは瀕死にまで追い込まれたときに蘇生薬を飲ませてもらうなど単純に助け合うためであり、義務となっている。

そして普段から人付き合いが少ない（自分のようなタイプね）エルフは、そういった者同士で強制的に組まされるようだ。

過去には、そんなことは面倒だと言ってソロで大規模討伐に向かった結果、そのまま二度と帰っ

て来なかったエルフもかなりいたため、今はPTを組まされることに不満の声は出ないとのこと。

いつもソロ活動中のルイさんも大討伐の際は必ずPTを組んで挑んでいた、と本人からのお言葉もあった。

「なるほどね、その大討伐の指示が下されたら、このメンバーで挑むことになるわけか……確かに気分が知れている人と組んで戦う方がいいよな」

自分が感想を言うと、ロイドくんが「その通りです！ だから本当にPTに入れてくれて感謝してるつす！」と力説していた。かなり心細かったのかもしれない……何せ自分のようなプレイヤーと違って、こちらの世界の人は死んだらそこまで。一度の負けが全ての終わりを告げるのだから、彼らが戦闘に挑む姿勢は真剣そのものだ。もちろん自分も真剣に戦っているが、間違いなくそれとはかけ離れたレベルにある。

そんな状況下では、少しでも信頼できるPTメンバーを得られるかどうかが生死に直結する。知らない人とのPTは連携の問題もあるが、何より不安なのは「いざというときに背中を預けられるか？」だろう。「死人に口なし」と言うし、故意に見捨てられたとしても死んだら糾弾も何もできない。本当にどうしても助けられない状況もある故に、その場になかった他人が後からどうこう言うのも難しい。

「アース君はあくまで善意の協力になるけど、私達には参加する義務がある。大討伐前に少しでも

経験を積んでおいた方が、生き延びられる可能性は間違いなく上がるわ。今日はここの辺で引き揚げるとして、次からはもう少し深い場所で戦うことにしましょう」

ルイさんは自分のためにあえて口に出して教えてくれたのだろう。エルとロイド君はその言葉に頷いている。

「協力できるタイミミングだった場合は必ず参加させてもらうよ。そのためにももう少し強くなっておかなきゃね……」

今日のモンスター遭遇数から考えれば、その日がやってくるのは決してそう遠くはないと分かる。しつかり準備しておこう。

「で、アース君」

そんなことを考えていた自分に、ルイさんが話しかけてきた。

「そろそろ軽く食事を取りたい。肉まん頂戴」

その極端な温度差に、自分はガクツと肩を落とす。シリアスな雰囲気が一瞬の内に木こっ端ぼ微塵みじんですよ……

そんなこちらの心境などお構いなしに、ルイさんはかわいい手をひらひらさせて肉まんを要求してくる。その手に肉まんを載せると、彼女はすぐにクッキングシートもどきを剥がしてはむはむと食べ始めた。

「私ももらえるかしら？ ルイ、お茶を出して」

「すみませんアースさん、僕にも一つ頂けると助かります」

と、エルやロイド君も要求してくるので、二人の手に肉まんを置いてあげた。いつ出しても作りたての熱々を食べられるアイテムボックスの性能は、ある意味最大のイカサマだろう。これなくしてこんな風に他人に料理を提供することは難しい。

この後も軽く探索を続けた後、村に帰ってモンスタアの素材を売り払い、得たお金を均等に配分して今日の活動を終了した。



【スキル一覧】

〈風迅狩弓〉 Lv 16 (↑2 UP) 〈剛蹴〉 Lv 27 (↑3 UP) 〈百里眼〉 Lv 25 (↑1 UP)

〈技量の指〉 Lv 9 (↑1 UP) 〈小盾〉 Lv 25 (↑2 UP) 〈隠蔽・改〉 Lv 3

〈武術身体能力強化〉 Lv 42 (↑2 UP) 〈スネークソード〉 Lv 46 (↑3 UP)

〈義賊頭〉 Lv 20 (↑1 UP) 〈妖精招来〉 Lv 5 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能)

追加能力スキル

〈黄龍変身〉 Lv 4

控えスキル

〈上級木工〉 Lv 32 〈上級薬剤〉 Lv 21 〈釣り〉 Lv 2 〈料理の経験者〉 Lv 10

〈鍛冶の経験者〉 Lv 21 〈人魚泳法〉 Lv 12

EXP 30

称号・妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者

妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相

託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー (胃袋限定) 義賊

人魚を釣った人 妖精国の隠れアイドル

プレイヤーからの二つ名・妖精王候補 (妬) 戦場の料理人

4

「では、今日からはより深い場所に行きましょう。大討伐の日時も発表されたので、それまでに少しでも強くなっておかないと。大討伐さえ終わればしばらくの間は魔物が大幅に減るから、のんびりできるはずよ」

ルイさんの言葉に、自分とエル、ロイド君が頷く。

今日からは大雑把に区切ってエルフの森の中層に入る。同時に複数のモンスターが襲ってくるのが当たり前になり、モンスター単体の強さも上がる。だが、その中層でも安定して戦えるようになれば、大討伐を乗り越えられる可能性はぐっと高くなる、とルイさんは言う。何度も大討伐に参加してきた経験者の意見だし、正しいと思っていだろう。

「それにしても、戦いがかかなり多いわね。嫌なことが起きなければいいけど」

エルがそう漏らすのも頷けるが、運営の公式サイトにはイベントとして提示されていないので、これも「ワンモア」の世界側が自主的に引き起こした状況なのだろう。大討伐が終わったら、しばらくエルフの村でのんびりしたい。

「エルさん、ここが踏ん張りどころです！ ルイさんが仰った通り、大討伐が終われば森は数十年は静かになるです！ 僕も大討伐が終わったら、家の畑に実った麦や野菜なんかを収穫する手伝いが待ってるです。そのときに無事でよかったですと笑い合えるように、今は頑張るときです！」

ロイド君の発言に、エルも「そうよね、そうなるようにしないとね」と言っている。

エルフの村に来たとき、自分の目は聖樹様に釘付けになってしまっただけで、周りをよく見ていなかったが、農作物の収穫の時期を迎えていたんだな。

「ロイド君の言う通りだな。しっかり気合を入れて頑張っておかないとな」

自分の言葉に他の三人が頷いたところで、森の中に分け入った。

今日は森の浅い所ではマジックパワーなどを温存し、中層に十分な余裕を持って進むという大討伐を見据えた訓練を行うことになっている。

もちろんMPポーションも持つてきているし、休息でMPを回復することも可能ではある。だが、ポーションは数に限りがあるので休息する余裕がない可能性も否定できない。

ルイさんからの経験談を踏まえて、序盤はできるだけアーツに頼らず基本的な攻撃だけで倒すようにする。かといって、倒すのに時間が掛かり過ぎるのもダメだ。自分やエル、ロイド君三人の連

携を磨く必要があった。

「せいっ！」

スネークソードを伸ばして、ハンティング・ホーンの角を側面から叩きつけるように切る。ルイさんから、ハンティング・ホーンの角は突くことには向いているが横からの衝撃にはやや弱い面があるとアドバイスをもたらしたので、早速試したのだ。

自分の攻撃を受けて、明らかに大きくよろけるハンティング・ホーン。確かに普通に攻撃するよりも効果があるようだ。

「伏せて！」

ハンティング・ホーンが見せた隙を突いて、エルが後ろから指示を飛ばす。自分が地面に伏せた直後、エルとロイド君の長弓から矢が放たれた。

条件がよければまさに一撃必殺といった感じで敵を倒せるのが長弓の魅力であり、エルフの長弓となれば特に威力が高い。体勢を崩したところに十分弦を引いたエルフの長弓から放たれた矢は、強靱なはずの甲殻を容赦なくぶち抜いて、ハンティング・ホーンに死を告げる使者となった。

ちなみに後で自分も撃たせてもらったところ、【双砲】を六割の強さで撃つても三〇%ぐらいの確率で跳ね返ってしまった。

「お疲れ様、これぐらいの時間で倒せるなら問題はなさそうですね。そろそろ中層が近いわ。中層から

は今まで通り、アーツも使って戦いましょう。それと、必ず四匹以上で行動しているランニング・ハンターには注意して。二足歩行の爬虫類のような外見の動物よ。そいつらに目をつけられたら絶対に逃げてはだめ。足が速いから追いつかれるし、木に上っても体当たりで折って落とそうとしてくるから」

なんか、その説明だと小型の恐竜をイメージするんですがね。そういうのが出る映画も結構あったっけ。そんなことをのんきに考えている自分とは違って、エルとロイド君は次々とルイさんに質問していく。横から聞いていて分かった特性はこんなところだ。

一、弱点は体の左前面にある心臓だが、黒くて硬い鱗で覆われており、十分な攻撃力を持った長弓でなければ貫いて即死させることは難しい。

二、そのため、基本的には顔面や鱗があまり頑丈ではない側面からの攻撃で倒すことになる。

三、ただし集団で行動していることが多いので、側面や背面に回り込むには数で勝っているか、高く跳躍できるか、姿を誤魔化せる能力があるか、いずれかでないと少し難しい。

四、比較的火に弱い。炎系統の魔法使いがいるのなら範囲魔法でなぎ払うべき。

こんな感じ。自分にできるのは〈隠蔽・改〉を用いた不意打ちと、《大跳躍》&《フライ》によ

る跳躍コンボからの攻撃、【強化オイル】による火炎攻撃といったところになりそうだ。

「恐ろしい魔物っすね……ルイさん、中層にはそいつらがうようよいるっすか？」

モンスターの説明と質問への答えを聞いたロイド君が、再びルイさんに質問を投げ掛ける。

「中層ならまだそんなにはいないわ……と言ってあげたいのだけれど、大討伐直前のこの時期ではそうした考えは捨てておく方が無難ね。もう一度繰り返し、どんなに怖くても逃げちゃだめ。絶対に追いつかれて、無防備な背中から喰われるだけよ。恐怖心に負けて逃げて、結局追いつかれて……そういう結末を迎えてしまったエルフは多いわ」

ロイド君の顔がやや青くなっている。無理もないか……とはいえ、そういう事実もしっかり伝えておかないと、最終的に困るのはロイド君本人だ。

「ルイさん、そいつらの特性は分かった。で、そいつら単体の強さはどれぐらいなの？」

足の速さや集団で行動する厄介さなどは分かっていたが、肝心な強さがまだあんまり見えてこず、自分はその問い掛けた。

「単体の強さならハンティング・ホーンにも劣るわ。前面の鱗は硬いけど、側面はそうでもない。足は速いし噛み付く力は強いけど、魔法やブレスは使えない。単体ではそう強くないからこそ、徒党を組むのだと言い換えられるわね」

なるほど、そういう部分は人間に似ているな。PTプレイはお互いの長所を生かし、短所を打ち

消し合うものだから。

ランニング・ハンターは防御力の高い前面の鱗を生かしつつ側面をカバーするため、横一列になって襲ってくるんだそう。そして目標に接近してがぶり、と。

「じゃあ、突っ込んでくるところに炎の魔法でも撃てば自滅するの？」

エルの質問に、ルイさんは「ええ、そうよ。最大の弱点は突進攻撃しできない知能の低さね」とぼつさり。こっちの一番の敵は、脅えてしまう自分自身の心なんだそう。

「いい？ どんな魔物に出くわしても慌ててはダメ。冷静で居続けることが生き延びる最大のコツよ」

ルイさんはそう話を纏めて歩き始めた。いよいよエルフの森の中層へと、とらちゃん案内を頼りに足を踏み入れる……



エルフの森の中層に入ってから、しばらくの時間が経過している。例のランニング・ハンターとやらは、まだ出てきていない。

「《ポイズン・スネーク》！」

でかいカマキリの外見を持ち、体は黒くて目と前脚の鎌かまの刃部分だけが不気味に赤く光るモンスターのブラッドサイス・イーターのペアと遭遇してしまった。一匹をルイさんが、もう一匹を自分とエルとロイド君の三人がかりで対処中である。

先ほど自分が繰り出したアーツにより、スネークソードの先端がシユルシユルと地面を這はって敵の腹部に到達し、毒蛇の牙のように思いつき突き刺さる。

だが、そんな攻撃をもろに受けたにもかかわらず、ブラッドサイス・イーターはのけぞりもせず、右の鎌を自分に向けて振り下ろしてきた。

盾系アーツ《シールドパライ》で弾はじくことによつてダメージを大きく軽減したものの、その衝撃はかなり重く、自分は体勢を崩された。そこにもう一つの鎌が襲い掛かってくる。

(アーツの発動が間に合わない！)

仕方なく、今度はアーツなしのまま小盾で防御する。ドラゴンの骨から自作した頑丈な小盾をもつても完全に受け止めることはできず、腕にまで衝撃を届かせてきた一撃によつて、自分は空中に吹っ飛ばされる。

ただし、吹き飛ばされたのは半分わざとだ。あえて自分から飛ぶことで衝撃を逃がし、ふんばるよりもダメージを軽減するテクニックを利用したのだ。しつかり受身も取って、落下ダメージをなるべく減らす。

「だ、大丈夫ですか!？」

周りからは派手に吹き飛んだように見えただろう。牽制攻撃でモンスターの行動を妨害していたロイド君が、自分を心配して大声を出す。

「わざと飛んだだけだ……大したダメージは受けていない!」

不安そうなロイド君を安心させるため、自分の状況をロイド君へと伝える。受けたダメージは大体ヒットポイント最大値の二〇%ほど。直撃したら危険過ぎる一撃だったが、これぐらいで済んだのだから御の字だ。ポーションを一本自分の体に振りかけて、すぐ戦闘に復帰する。

「《穿孔弓》の準備が完了したわ! 行くわよ!」

エルが〈長弓〉のアーツを放った。発射後に即着弾するという現時点における全ての弓アーツの中でも最速の矢速を持つ上に、攻撃力も非常に高いアーツだ。

何それチートじゃん、と思われがちだが、当然それなりの弱点がある。それは、放つまでに一切動けない状態で三〇秒ものチャージ時間が必要だということと、射程が〈長弓〉のアーツの中で最短なのだ。

隙が大きいから仲間のフォローのない対人戦闘じゃ自殺行為だし、モンスター相手でもかなりの工夫がいる。大半の使い道は、こうやって他の人が戦って作った時間を生かしてチャージを済ませる形になる。

ドシュン! とエルの弓から放たれた矢は、ブラッドサイズ・イーターの胴体を一瞬で食い破り、貫通した。特性上痛覚がないとしても、胴体が消え去ってしまっただろうともあるまい。地面にはらばらと落ちたブラッドサイズ・イーターの鎌や頭部などが光の粒子に変わり、綺麗に消え去っていく。

「そちらも終わったみたいね」

ルイさんはすでもう一体のブラッドサイズ・イーターを倒していたようだ。こちらは三人がかりでようやくだったのだが。

「いきなり手荒過ぎる歓迎よね、中層最強の魔物であるブラッドサイズにいきなり出遭うなんて」  
エルがぼやく。そう、この手ごわい相手はエルフの森中層で最強のモンスターだったのだ。一緒に行動している数は最大でも二匹という特性があるのでまだマシな部分もあるのだが、ルイさんがいなければ非常に危なかったのも事実だ。

「し、死ぬかと思っただけ……アースさんが前に出てくれたので本当に助かったすよ……」

ロイド君は緊張の糸が切れたのか、そう言葉を漏らしながら何とか落ち着こうと必死で深呼吸を繰り返す。とらちゃんに確認して、付近にモンスターがいないことは分かっているから、ロイド君が落ち着きを取り戻すまで待つぐらいの時間はある。

「半分わざととはいえ、あそこまで見事に体を持っていかれるとは思わなかったな……鎌の切れ味



だけでなく、腕力も相当なものだ」

自分も正直な感想を口にする。《フライ》を使ってコントロールしないと危険なほどの高さではなかったが、それでも軽鎧を着込んだ一人をあまで大きく吹き飛ばすのは、尋常ではあるまい。サードの街近くの山道ダンジョンにいたオーガとも、パワー勝負で十分遣り合えそうである。

「かなり厳しいスタートになつてしまつたけど、単体でならあれ以上の強敵は存在しないわ。だからどんな魔物が出てきても脅える必要はないわよ」

ルイさんが発想の転換を勧めてくる。確かにいきなりながら最強のモンスターを打ち破れたのだから、中層のモンスターとでも十分に渡り合える自信になるか。

「そ、そうっすね！ ルイさんの言う通りっす！」

どうやら平常心を取り戻してきたらしいロイド君が、両手を握り締めつつ自分自身に言い聞かせるように大きめの声を出した。そうすることで、半ば無理やりにでも自分の中に生まれた恐怖心を打ち消したいのだろう。

「気合を入れるのはいいけど、それで体を固くしては意味がないわよ。注意してね」

そんなロイド君の頬を軽くなでて、そう忠告するルイさん。おーおー、ロイド君の顔が赤くなつてるね、実に微笑ましい光景だ。

「さて、ひと息つけたことだし、そろそろ進みましょうか」

くすくす笑いながらエルがそう切り出し、ロイド君をあたふたさせる。心なしか、とらちゃんも優しい目でロイド君を見ているようだ。

「ん、そうだな。とはいえ……あんな強敵がうろついている以上、まずは中層の中でも浅い場所です慣れるべきだと思うが、どうだろうか？」

この自分の意見への反対はなかった。

実際、この後でランニング・ハンターの六匹チームや、ハンティング・ホーン三匹&ツインブレイド・ホーン四匹という団体さんが襲ってきたりと、モンスターの歓迎を受けた。

ルイさん無双が炸裂したり、自分の【強化オイル】をブレゼントしたりと何とか凌いだしのが……あまり無理に戦い続けても危険なだけなので、ほどほどのところで切り上げて村へと帰還。

ここから先に行くには四人でも不安が残ることを匂わせる一日になった。また新たな仲間を募る必要性が高まつてきたな……

立ち読みサンプル  
はここまで



【スキル一覧】  
〈風迅狩弓〉Lv 16 〈剛蹴〉Lv 27 〈百里眼〉Lv 25 〈技量の指〉Lv 10 (↑1 UP)  
〈小盾〉Lv 26 (↑1 UP) 〈隠蔽・改〉Lv 3 〈術身体能力強化〉Lv 42  
〈スネークソード〉Lv 47 (↑1 UP) 〈義賊頭〉Lv 20  
〈妖精招来〉Lv 5 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能)  
追加能力スキル  
〈黄龙変身〉Lv 4  
控えスキル  
〈上級木工〉Lv 32 〈上級薬剤〉Lv 21 〈釣り〉Lv 2 〈料理の経験者〉Lv 10  
〈鍛冶の経験者〉Lv 21 〈人魚泳法〉Lv 12  
EXP 31  
称号・妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者  
妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 人災の相  
託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー (胃袋限定) 義賊  
人魚を釣った人 妖精国の隠れアイドル  
プレイヤーからの二つ名・妖精王候補 (妬) 戦場の料理人

5

「おーい、ロイド君。こんな感じでいいのーか？」

「あ、大丈夫です、そんな感じでお願ひするっす！」

今自分とエルは、ロイド君の実家が所有している大きな小麦畑にて、収穫作業を行っている。知り合いに知られたら、大討伐を間近に控えているのに何をやってるんだ、もつとレベルを上げないといけないんじゃないか、と言われそうだが……実は昨日、中層への初挑戦を終えて村に帰ってきた後に、気が抜けたのか疲れ切ったのか、はたまた両方か、ロイド君がぶっ倒れたのだ。

ルイさんはそれを、初めて強敵を相手に命を懸けて戦ったストレスが原因だと判断。ロイド君の案内で両親の元へ直行し、彼が立派に戦ったことと、少し休息が必要であることを告げた。するとロイド君の両親も、ブラッドサイズと戦ったのなら無理もない、と理解を示して彼をそのまま休ませた。

しかし、一日経ってログインしても、ロイド君がまだ戦える状態にまで回復していないのは、彼の青い顔を見れば一目瞭然だった。